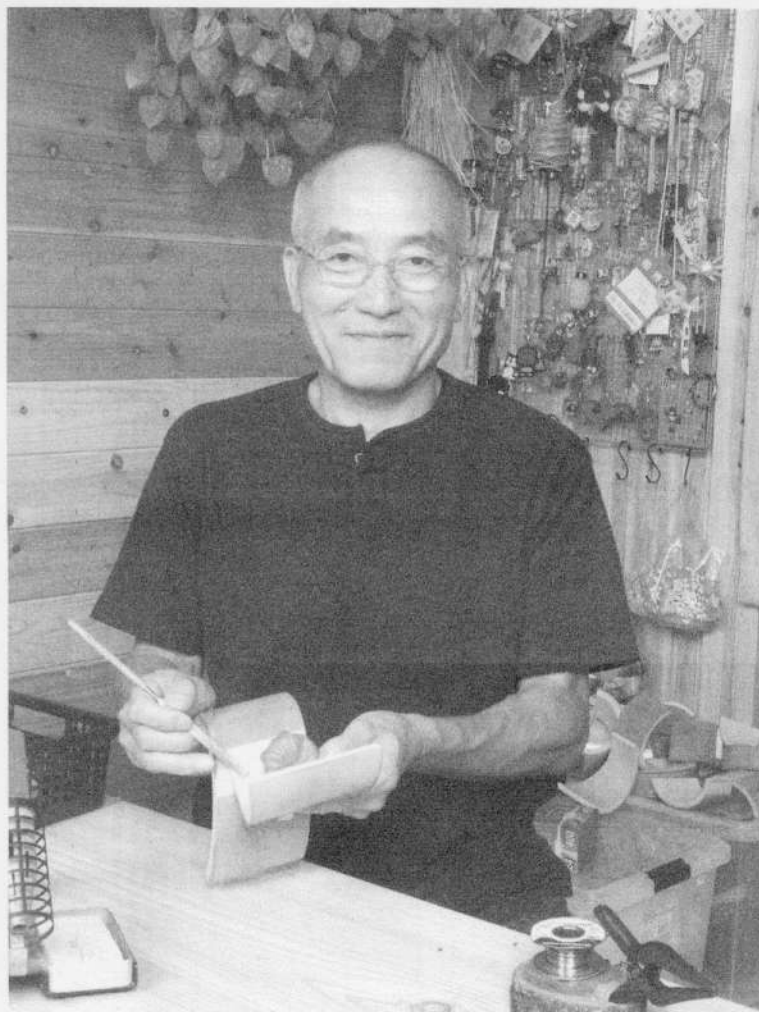




黒木さんは「せこほ一ずの作小屋」で、昔ながらの生活体験や農作業体験も受け入れている

黒木敬介さん

宮崎県西米良村（JA西都管内）

丹精して育てあげたホオズキが、柔らかな明かりを放つキュートなランブシェードに変身。風情に富んだ「ホオズキ小灯し」の魅力を山里に訪れる人たちに伝えている。

文・茂島信一 写真・水野ヒロシ

「わ あーすてき」

スイッチを入れると、だれもが声を上げずにはいられない。

見慣れたホオズキが、真っ赤にともえる。ランブシェードの役目を果たすホオズキの表面には、ふだんはめだたない葉脈が、毛細血管のように、幻想的に浮かび上がる。

照明を落としたリビングの片隅や、玄関わきに置くだけで、柔らかな赤い明かりは、山里の風情を醸し出してくれるようだ。

「いい色でしょう。この色を初めて見たときに、一生作っていきたくって思っただけですわ」

と話す黒木敬介さん（60）が、「ホオズキ小灯し」の作り手だ。

黒木さんは、昨年の六月、自宅の隣に「夢房」と名づけた工房を建設。ホオズキ栽培のかたわら、ホオズキ小灯しの製作を体験する教室を始めた。宣伝らしい宣伝はしていないが、一年間で約八十組みが体験に訪れたという。

「喜ばん人はおらんですよ。魅力は、この色と、形ですね。西米良のホオズキは、ハート形なんですわ。だから光を入れると、ふつうのホオズキとは見え方がひと味違うんです」

宮崎県西米良村は、熊本県との県境にほど近い、山村である。標高が高いため、昼夜の温度差が激しく、ホオズキ栽培に

ぴったりの環境だった。

そこで昭和六十三年ころからいち早くホオズキの産地化に挑戦。たちまち形のよさ、色の鮮やかさが市場で高く評価され、「西米良のホオズキ」は、ちょっとしたブランドに成長する。

ところがやがて、他産地も続々と名乗りをあげるようになり、競争が激化。

「自分たちのホオズキの付加価値を少しでも高める方法がないか」

と、探っていた黒木さんが、平成十一年ころ耳にしたのが、ホオズキを使ったユニークな工芸品だった。

「東京の造形作家がそういうものを作っている」と聞いたんです。それで、試しに自分で作ってみたら、驚いた。自分のホオズキがこんなにきれいになるなんて、すごい！ って」

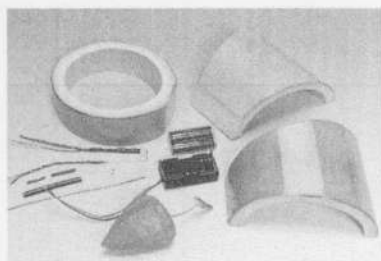
当時、村役場の職員として、村おこしも手がけていた黒木さん。さっそく、東京から作家を招き、講習会開催の音頭をとった。

メンバーは、JAや森林組合の青年部員などで構成される「ふるさと研究会」。このときのメンバーが中心となって、十二年の年末には、西米良村最大の観光スポットである温泉施設に、ホオズキ小灯しのクリスマスツリーを製作。翌年には、商店街のホオズキ七夕飾りや、ホオズキ小灯し品評会も実現した。

だが、黒木さんには、さらなる願いがあった。ホオズキ小灯しを、だれもが気

ホオズキ小灯し作りに挑戦!!

—身近にあるものを使って、オリジナルのランプを作ってみませんか—



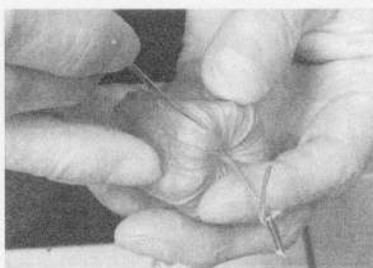
●材料／電飾材料（スイッチ・収縮チューブ・LED・抵抗器・配線材・電池ボックスなど）、乾燥させたホオズキ、ケースの材料（煮沸した竹材、台座は既製品を使って作ることもできる）、工具、接着材など

1 LED（発光ダイオード）に、抵抗器とリード線をはんだ付け。さらに、自在に曲げられるように、アルミ線を通して収縮チューブで固定する。※黒木さんの体験教室では、ここまで作業したものを用意している

2 LEDの光が拡散するよう、光る部分の表面に目の細かな紙やすりをかける。市販の拡散キャップをかぶせてもよい

3 輪切りにした竹材2個をビスで留め、台座の部分に小さな穴をあける。竹は、油を抜くために表面をバーナーで焼き、さらにニスを塗っておくと、時間がたっても変色しない

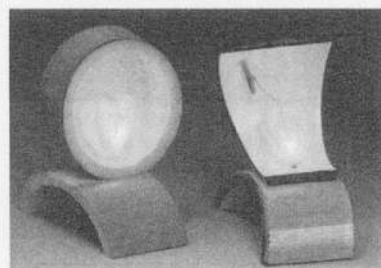
4 ホオズキの種を出す。葉脈に沿ってカッターで切ると、切り口



がわからない。切り口は接着剤でふたたびふさぐ

5 電池ボックスを台座の裏側に両面テープで留める。穴にLEDを通し、リード線を電池ボックスにはんだ付けする

6 ホオズキの先端に切り込みを入れ、LEDを通す。LEDの位置は好みで調整。アルミ線を折り、余分な配線はまとめてテープで留める。ホオズキの軸を、接着剤で竹に固定したら完成



軽に手に取れる、さらには自分で作れる工芸品にしたかったのだ。

気に入った表情のホオズキを使う

十八年に村役場を退職した黒木さんは、ホオズキ小灯しの改良に取り組んだ。

改良のポイントは、なるべく安く、簡単に作れること。

それまでのホオズキ小灯しは、ムギ球と呼ばれる小さな白熱球を使用。ムギ球は電流をたくさん必要とするため、ACアダプターなど材料費も安くはなかった。これを黒木さんは、乾電池で使用できないかと考えた。

「そこでムギ球の代わりに使ったのがLED（発光ダイオード）です。LEDなら単三電池二本で五十時間だいじょうぶ。ムギ球みたいに熱ももちませんしね」

自分専用のはんだごてを持つているほど、もともと工作好きの黒木さん。リード線、抵抗器、電池ボックスなど、電気関係の必要な材料は秋葉原から取り寄せる。さらに、自身で実験を繰り返しながら、だれもが一時の間ほどでホオズキ小灯しを組み立てられる作り方を練りあげた。体験費用も、ホームセンターを巡りながらできるだけ安価な材料を探すことで、千五百円に抑えることができた。

「はんだ付けが必要なLEDの配線などはわたしがあらかじめ作りおきしてしまから、安心してください。台座の部分

は、竹のほかにも、かごやコップなど、身の回りのものからお好きなものを選んでいただければいいですよ。もちろん、ホオズキも自分で選ぶことができます」

と、ケースにいったいのホオズキを見せる黒木さん。どれにしようか、と手にとってよく見てみると、ホオズキ一つ一つにいろいろな形や葉脈があることが改めてわかる。

気に入った表情を見つけたら、その面を表にして作るのがコツだ。

工程の内容は、自分の時間に合わせて、簡単にも本格的にもできる。しかし、どんなに時間がないという人にも、完成品をただ買ってもらおうのではなく、自分で作ってもらおうのが、黒木さんのこだわり。自分でホオズキを選び、作る、その時間こそが、ホオズキ小灯しへの思い入れや、西米良村での思い出につながっていくと、黒木さんは信じているからだ。

十二年に始まったホオズキ小灯しのクリスマスツリーはその後も続き、いまや村の観光名所になっている。最初の講習会に参加したメンバーの中から、温泉施設で自分の作品を販売する作家も誕生した。黒木さんがまいた種は着実に育っている。

「ホオズキ小灯しが、西米良の未来を輝かせる明かりの一つになれば」

そんな願いを胸に秘めながら、黒木さんは今日も、工房で、次のホオズキ小灯しのアイデアを考えている。